

GCOE 国際会議出席報告書 (外国旅費用)

拠点リーダー 川合 光 殿

(ふりがな) 氏 名	ふくしま けんじ	所属・職名	指導教員名 (院生の場合)
	福島 健二	基研・助教	
Tel,Fax e-mail	075-753-7027 / 075-753-7068 / fuku@yukawa.kyoto-u.ac.jp		
発表題名	Strangeness in the PNJL model		
著者名	Kenji Fukushima		
会議名称 ・開催期間	Strangeness in Quark Matter 2008 自 2008年 10月 6日 ~ 至 2008年 10月 11日		
開催地 (国、市)	中華人民共和国、北京		
出張期間	自 2008年 10月 5日 ~ 至 2008年 10月 11日		
国別参加者数	全参加者数 181人 / 中国・約 50人、ドイツ・約 40人 アメリカ・約 30人、日本・約 10人、フランス・ブラジル・韓国他		
<p>発表内容、聴衆の反応、質疑応答、その他について簡潔に記述してください。 (口頭発表・ポスター発表の別も文中に明記すること。)</p> <p>基調講演 (口頭発表) で、ポリアコフ・ループを入れた南部 = ヨナラシーニョ模型で計算したクォーク物質の状態方程式について総合報告した。特に、ストレンジ密度をゼロにする拘束条件をかけた場合のストレンジクォーク化学ポテンシャルが、ポリアコフ・ループの遮蔽効果から正しく導かれることを示し、相図上の等エントロピー / バリオン密度線の振る舞いについて議論した。</p> <p>講演後の質疑応答では、ドイツの研究者を中心に、賛辞を頂戴するとともに、K中間子は相互作用が弱いので、ストレンジネスを持ち去ってしまい、ストレンジ密度ゼロという条件が厳密ではないのではないか、という批判が寄せられた。これは尤もな批判ではあるが、いま注目しているのは高温クォーク物質であり、ハドロン相は考えていない。相転移温度より低温側を取り扱うときには、確かに重要になるであろう。</p> <p>また会議期間中に亘り、さまざまな研究者と有意義な議論を交わすことができた。特に Redlich と Mueller は、最近彼らが同じ模型を使った計算をしていることもあり、議論から示唆深い意見が得られた。また Blaschke に、最近、彼の計算した結果についての詳細な説明を受けた。全体に、きわめて有益な、会議参加であった。</p>			